俳諧発句題叢

へ15
4132
4—4

別5
4132
4-4

大歌所御歌　加藤千蔭大人書　一冊

常徳院殿御撰
新百人一首　同大人書　一冊

古今和歌集序　同大人書　一冊

俳諧発句題叢　乾　徳目録

そくく上

十月初　非春庵　二
小六月　非遊　三
玄猪　四　蓮亭忠　五
神楽諸　十四
非遊　九
炉開　十三
松風時雨　久時雨　十四
初氷　十六　云まゝ　十七
歌仙巻　二十巻　十九

毛杭 廿三　霧杭
杭柏　杭芒
杭芦　杭萩 廿七
杭雞冠　杭菊 廿八
杭苧　杭薤
杭藁　杭茎
杭虫　杭垂 三十
杭杷花 廿三　八重花 廿三
麦蒼　毛蝶
毛虫　細代苧
竹筒　黄奥戔

杭杵 廿四　杭柳
杭尾花 廿五　毛芒 廿六
杭萩　杭蓬
杭苧　杭蔓
杭蕪　杭蓬
毛菊　毛茎 廿九
山茱花 廿一　帚花
毛牡丹　茱花 卅四
毛蝿　毛蝶蝶 卅五
水魚 廿六　紫漬
子苧 廿七　唐平

鴨 卅一　小鴨 卅二　鶺鴒 卅三
鷓鴣 卅三　水鳥　鶺鴒
象 卅五　毛ぐり卅

霜月 卅七　毛氈
猪着　南火燒
子焼人　非糸
神設 五十　大作蒋 五十一
教雷 五十三　雷鳥 五十四
雷花　雷 五十六
夜雪 六十　月前雪 六十一

鈴鴨　鬢置 卅八
深草鳥 卅九　子茶
毛雪 四十　毛也忘
雪子鳴　雷 五十二
雷杭
又雪 五十九
山雪

峯雲 六十三
原雲 六十四
川雲
雲見
雲龍
雲車
水水 六十七
綾冰
霙
黄水
生姜湯

蒼雲
林雲
浦雲
星雲
雲鶉
雲風
雲等
氷柏
綾頃
冬雨 七十
藥喰
胝 七十二

地雲
急雲
庭雲 六十五
雲仏
雲雀
氷
霊水 六十八
凍
冬雨 七十
鶏卵酒
胼

霙宇
冬菊 七十三
冬梅
冬桜
穀 七十七
乾雞
鷹 八十
冬若冬
冬薇菜
于葉
凡名吹

沈
石蕗花
冬梅
梔花 七十六
鮒鱸 七十八
鮒 七十九
鷹狩
追冬狩
鶏葉
葱
納豆

擬擬
宝吹梅
臙梅
枝花
緑
壮蛎
後冬
力草
大根葉
生姜醤 八十二

冰仏
早梅 七十四
冬桜 七十五
生海鼠
鮒
杜夫魚
冬時 八十
教草
蓋葉 八十二
沈漬

阿弗利加土人 全五
仏蘭西人 全六
手八 全八
手套 全九
手紅 一
手袋 九十一
手巾 九十二
炭竈 九十九
火箸 一百三
理火 一百三

鞭 八
手杖 八十七
手拭巾 九十七
手水 一
手巾 九十九
炭 一
火桶 一
曉燈 一

鼻筒 一百六
鼻紙 一
手巾 一百七
手水 一
布団 一百九
煤掃 一百十五
年賀 一
芸分 一
鶏卵 一百十五
服部板倉 一百十五
歯朶 一
網焼噌 一

蘭園 一百六
鼻紙 一
手巾 一
札納 一百十五
餅搗 一百十五
年末挨 一
芸分 一
年越 一
芸妓 一
糠味噌 一百十五
松立 一
年忘 一

御門 一百十六
手巾 一百十六
手洗 一
夜着 一
餅花 一
掛乞 一百十三
松飾 一
年内立会 一百十五
門松 一
年市 一
蓼酢 一
磨 一
年用意 一

年の内　年慶
春の年　夏至
秋の年　夏天
年梅　　暗年百九
　　　　年鏡
　　　　春近
　　　　大晦日
　　　　除夜
　　　　年賀
　　　　年男
　　　　年越
　　　　年籠
　　　　年守
　　　　年木
　　　　年玉
　　　　年礼
　　　　年始
　　　　年酒
　　　　年魚
　　　　年男鄙俗

藏五太祭輯

十月

十月の己れに見合す多田か
十月や梶八衣の本すりや
十月や柳云爺に文時白
十月や多くの亡あり
十月や句もれ人の生あり
十月八神に老の力あり
十月や老つ乱れ
十月や老の力あり
十月や老の力あり
十月や老の力あり

すゝきほたすゝき葉の花　蘆葭　支来
すゝき人迹を尺とする秦大夫　尾風
すゝき旅のそゝろ心を知れる人　一歌
すゝきまねるに和如　枝舌　世井
すゝき三夜の白れる等う　我乃　袁来
すゝき絶てふさゝ庵うし　去来　慧
すゝき人よりの便り　秋色
すゝき生ひそめしより　乙鳥
すゝきまねてみるまれ　吉南
すゝき弟よりのつ　涼

秋冬之部　宗化

酒のむ日ハすゝきも枯尺を升也
小笹ふく風もやゝ升也
折もすゝきよりそゝ升也
海も方ゝ國ゝ升也
すゝきおもき秋ふかき升也
すゝき人迹尺升也
すゝき旅のそゝろ升也
すゝきまねるに升也
すゝき三夜の白れる升也
すゝき絶てふさゝ庵うし升也
すゝき人よりの便り升也
すゝき生ひそめしより升也
すゝきまねてみるまれ升也
すゝき弟よりのつ升也

小春　魚沼の綿登

時雨ふる窓の笹そよぐ風　華水
小春日和一日走りありく　昭九
海風や一日走りありく　業飛
しぐれ来る草の笹ふく小夜の月　道元
　　雪堂
　　一歌
　　雲峰
　　憂古
　　全
　　蓼古

月雄
狂飛
弓子
柳亜
朱笑
仝
道光
仝
無限
竟松

芸堂
漢城
右雄
柳弓
雲堂
芝山
柑翠
月叢

柳は女

右等
玉厚

小六月

秋萩

秋萩の
枝もたわわに
咲きにけり
見る人ごとに
手折らまくして

一茶

秋萩に
駒繋ぎ居る
夕べかな

飛白双馬

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

朱美

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

笹庵

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

寒松

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

晩翠

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

南岳

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

一茶

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

飛白

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

双馬

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

笹庵

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

寒松

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

晩翠

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

南岳

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

一茶

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

飛白

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

双馬

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

笹庵

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

寒松

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

晩翠

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

南岳

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

一茶

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

飛白

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

双馬

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

笹庵

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

寒松

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

晩翠

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

南岳

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

一茶

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

飛白

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

双馬

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

笹庵

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

寒松

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

晩翠

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

南岳

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

一茶

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

飛白

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

双馬

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

笹庵

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

寒松

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

晩翠

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

南岳

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

一茶

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

飛白

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

双馬

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

笹庵

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

寒松

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

晩翠

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

南岳

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

一茶

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

飛白

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

双馬

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

笹庵

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

寒松

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

晩翠

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

南岳

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

一茶

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

飛白

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

双馬

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

笹庵

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

寒松

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

晩翠

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

南岳

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

一茶

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

飛白

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

双馬

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

笹庵

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

寒松

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

晩翠

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

南岳

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

一茶

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

飛白

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

双馬

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

笹庵

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

寒松

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

晩翠

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

南岳

秋萩や
垣根の外の
朱の鳥居

芭蕉忌

[illegible]
[illegible]
[illegible]

義ちやすきの意ニ用ひ
轢轢ハ車ノ音ニ
嗚呼淸月掛ケテ
ナヲ氣ニ入ラヌ
月モ又ナヲ十夜ノ
淸ク冴ヘ渡ル中ニ
南無阿彌陀佛ト大
木阿彌モ大ノ字ヤ
キウ〳〵ノ惡モ
作ルヤ十夜ノ
表ヤモツ
ル立テリ十夜ホ

九重
自雄
在亜
栄美
道意
未迪
月紀
合
一葉
淺狗
空雙

恵比須講

ホノ字ノ如ク掛ケ
ラの字ノ如ク一月
ラ有ム凡ノ長サヲ夷
夷ヲ二ツノ和ヲ以テ
夷ヲ元ヲ以テ俗ニ
俗ヲ以テ業ヲ
業ヲ以テ
非ヲ以テ
炉ヲ以テ

講ヲ以テ
夷ヲ以テ
壮ヲ以テ
夷ヲ以テ
一月ヲ以テ
非ヲ以テ
炉ヲ以テ
友ヲ以テ
雪ヲ以テ
酒

梵字
柳几
大江丸
道彦
完来
風
素甫
樗堂
佳々
賀
樗堂
幸孝

秋の末つかた木の葉ハ初時雨
拾ふころ松ふるころの一ト袋
この小詩と詠ん人 初時雨
ふみ等のあれハこそ初時雨
初冬名のみもるうち氷
初冬いつの間も岩そゝり初冬
時雨の時も岩そゝり初冬
いたゞきに雪ハ降ても

炉開のかしこや庵 氷
炉開や方丈ぞそゝる松元坊
炉開やそれにおもふ井の奥
口切や海苔の價も夏跡
口切やふるふる茶の風
口切されハ字そ机あり
初時雨 句の集ハ名題のもや初時雨
初しぐれさゝらうてふ初時雨
箕七のめでたの後や初時雨
その菜ふたの後や初時雨
初しぐれ人さゝ〳〵初時雨

○六

百姓
重厚
塗溝
黄吉
玄旭
尺艾
柳元
等雲
句碑
多磯
也旦

秋の末つかた木の葉ハ初時雨
拾ふころ松ふるころの一ト袋
この小詩と詠ん人 初時雨
ふみ等のあれハこそ初時雨
初冬名のみもるうち氷
初冬いつの間も岩そゝり初冬
時雨の時も岩そゝり初冬
いたゞきに雪ハ降ても

樗良
黄吉
白雄
春雨
斗入
士朗
樗堂
公古
丈古

業兆
兄並
ゐ彩筆
合
甘若
著三
一字
乙二
冥く
月花
合

大伴坂の児も笠要て初ゆる
登の坂のもり来て
江の上にくれこや初しぐれ
初しぐれあをめもそろそろ
初時雨こゝ紅葉の籬かな
氷柱まてゝゝ
雪降書凡はさめ
初ゆる
二十人のつゝりめ
丁子の素さる
時雨ものふる

卓池
井屑
武陵
又美
志宁
雲常
鈴谷
素洸
き
了國
松石

初冬

大根ゝ引めつゝ
初ゆる
策ふ
ゆ花に
小春
初ゆる
松に
雪の
さし越や
諸のゝ
海なる

尾張 逸人
若狭
美元
栃史
伊勢 社平
備中 素亭
一雄
無寿
覚会
几童

白雄
保吉
岱書
仝
勝石
斗入
大江丸
士朗
仝
仝
狗荘

琅六
春亜
蕪雄
湖江
舞雲
書要
木僊
樗堂
仝
栄邑
仝

末の夕をちかきあれハかなるとう	栄美
雪の夕をちかきあれハかなるとう	仝
夜寒のきさらぎさりゆくかなるか	有心
尽くさぬ人ありゆくかなるか	義至
捲の戸もあれなるしられか	仝
さびしさやあれなるしられか	鬼孫
陰尺の神もかなるか	一子
しられさる人のうき一下かな	仝
去る年就れうき筆先後	素卿
裏戸の時のちるかな	道意
去る年就れて風のま	仝

こし里に業をかなるか	岳猿
そそやんしんの先のかなるか	仝
ちそぶりとするの事たつかなるか	尺文
おもれハおもかなるて通りうう	去角
る七うへ松東之里村かな	梶義
笠の久に塘売越るかな	雪笠
主彼の栗さ笠石のかなるか	津角
つのひめとうハかなるとう	李関
かするすうれまの雲るかな	竜飛
こし里や雪のあるかな	竜於
花ちつかなるの地机ま	魯隊

[illegible]
[illegible]
[illegible]

あれくる年業自ふ何百ふ　城中　壺仏
苧の風も何百のものの来てそう　阿蓋
しそそや内義をそのまま次仏　一薫
母外を妻て何百のかそうそ手　朱陵
以下まのすくくすそ来る何百　養暁
急角しそ何百そよそう朱にそう　六輿
しそそや肩もそれぬふ月そ安　古静
読そ何百のそをそうそう　伝為
来め人を業教にそる何百や　末子
猿明の人そそれて降何百　卜幾
上法の嵐を深そそれふ　不意
　　一橋

払うもの何百やすそ漁笛　李天
そるまの風そ八等そう丘の京　甲斐百二
業妻の先に子何百ふ　妻義白井
塗たその寛妻たそる何百ふ　伊勢丹京
何百のより大ぎそ業教払の白　辺古遠古
そるそ来れ風手何百そう　英月
何百そそそそそ引ぬ　平城
表そくくハゆそそ何百そう　荘乙
めそそなのふ何百の先そん　仏京
もそそや再にそ素る指の妻　秀教
何百そんそる降そ名先唐の苧　二蘭

初雪　初雪や四方の山の折ふし

初雪や屋をたゝくや竹の音

初雪や流のごとくふりつゞく

初雪や降るそばより消られ

初雪のむら消ながら積りけり

初雪や流て氷る水の音

初雪やいおのそよめく夜半の声

初雪や庭のまつ葉の折ふしも

初雪や人の音なき夜半過

初雪や庭に出たる鶏の声

初雪や足たゝさゝる義の我ら迄

初雪のつもりやすさる垣根哉

押掛り初雪ながら来られけり

初雪や松が枝ごとの文月哉

初雪のをしや未こぬ咲さうし

初雪や厨の窓を白くいう

初雪のごとくふりたる人の上

初雪や古いくさめる壁の穴

初雪や人の音なき夜半過

折折の
夢未
淡く
保吉
盛書
賀状
斗入
自楽
無病
垣根
士朗

初氷

初雪や子どもこうれし　こゆる
初雪や狐もまよひをうくて出ん
初雪やうすものうつる屋根の色
初雪や猶にのこる松の枝
初雪やくらく猿をも真一
初雪や乳もとのその
初雪やかるかやねなる十けもの
初雪やとしの前々晩
初雪や人のうわさも初こより
初氷うすくうつりうつり
初氷うすくうつりうつり
初氷うすくうつりうつり

ちる木葉なりけり
未ふかれけちらすもをしき
ふるとしと春たちけふもいはやく
けふのさてもはやちる木葉
木葉ちるあたのこやの山路来て
つもるもまつしやすき木葉かな
あるじそそのかすものから
ちりやすき木葉の庭を
掃除のさそいそうろう我木葉
こうらいや秋の世もうき嵐ふく
風に笠一葉
風にむしろをおりせうろう
風に笠一葉も浮きうろう
こりごりやいつこうろう柴車
風ふせうろう
風や諸木うろうぼこ
風のけさそこにも老の
風や蹴のうろうとおうろうし

成美
道光

黄ろう
一葉

衣通姫

書葉
笠甫

小松女そのの
女史

黄しぼむ

白雄
召

凝風
保吉

黄葉庵
岱水

九紋九

風たのもしたつ　　珍石
風たすりゐ　　有亜
風やそもむすひ　　井の
風れへりつ　　仝
風よりゐもる　　胚丸
風やけさふる　　士朗
ちらくとも風れ苔の上　　仝
風や海一そいたる　　仝
半もるも風そのくれ　　松兄
風れゆくや心里あるそり　　高義
風や菜のをに　　六亀

風れそりとみそ
風たるそりく
風れやむ月
風やもよれ
風の止漆
風れ人もま
風や神の路
風やそもそー
風や心へ宮
風と金泥
風やおのみて

伊勢曲師
長署
六亀
伊勢曲師
業光
古琴
成美
五雪
梅英
子共
月化

風もなくて雪の降るの
風や湖岸をたゝくものもなく
風や又も花なの夜の松
風や孤月もなく雪のふりつゞ
風みだれを湧ゆくふゝみ
ふるもなくて風も業屋ふ
風や戸ぼそに籠れついて今
日もくれて風ふくに秋の詩
淡月もなくて風ふく松の葵
風や庵に訓たる松の有
風もなくて雪の降るの

東卿
無弦
等老
鳥巣
魯原
一葉
竟松
宗雄
梅月
漫々
蟹也

市中の風雪をよしとす
風の吹きつゞくや蓬の穴
風の星もなくたゞ山の上
風にかげゆらぐや淡の松
枝もなく風ふきて雪ふる
風や落のたゞれる岸山寺
風や月のおぼろ松のもと
風にのりてあるゝ山の寺
風にほそるそもう八日月
木もなくや完璧のかの篠竜
風や来ゝりたるゝゝ雨

雄峨
俳浪
晃明
武秀
語竹
亀洞
岸ナ
只雨
吾友
江鷺
古屋
方雨

風や鮒の魚のこゑ　　春方
風に洗れあけたる窓　　冬の曙

冬木立

二本に貸屋一軒冬木立　　公
冬木立月骨たに入遊かな　　几董
人ごゑや一里二里やな冬木立　　士朗
溪の橋をそりて伸しや冬木立　　業兆
乾風や雀もれまる冬木立　　汲古
三の月にさる影ろふ冬木立　　女雨柳
生れしもの小延そ冬木立　　鈴門
るハこれ池ぐるり冬木立　　蕪白

冬

枯

あるやひそりと冬木立　　枯米
枯しられたるのこりでもうしや冬木立　　春人
玉垣ハさてもつれうしや冬木立　　漫々
ひるも暗い本ハうそ冬木立　　枯柯　几仙
冬木立探多うて枯の腹よ　　龔兄
谷川の流あるうしや冬木立　　芝竜
冬枯や磐の岩れたるの兵　　存無
冬枯て高もうそ冬木立　　士朗
冬枯や杣戸にうたれ月夜　　公
冬枯やつゝらうたるこの秋　　乙圃
冬枯て鈴の服そうく美小　　樗米

雪

杭

冬杭の京にもみや葉の烟
冬杭の関に押やるまれ
冬杭やみも路も烟の中
冬杭やふの方うらの雪の暮
冬杭や江戸にそうこの歌う者
冬杭や外の者たち雪ハうし
冬杭や外に降こそうの義
小名の冬杭やそうひわ
冬杭やそうそうしぐれの松に雪
冬杭や冬てみ川のをかう
冬杭て氷も芝もうりうり

今
雪ハ
雪ハ

之
東路
来
一折
士朗

杭柳

杭て雪ハ京する八重桜
雪杭やそうそうも捨てある小屋
雪杭を庄のめくたる業汁や
杭くてみをを杭のめくる夜や
杭柳て雪ハこそたれをのうう風
雪をうう八重桜
雪杭やそうそうも捨てある小屋
杭くやそうの杭
杭柳てそうそうれハうう

望
素堂

柳園
道竜
素堂
風雪
白雄
漢宝
代寿
士朗
梅室
月居

抗　拒　海原のうねりもまてるさくもなく抗拒るさくもなく打のむまゝ詠て抗る物ゝ哉　永井久気

抗　拒　そハそうれも抗らかれうハちりくもてあそぶ抗拒る哉　古渡花

抗　芙　ふる川海のさゝ抗にくり抗る岸と抗てもなの芙ゝ哉　夏二

抗さまゝ不月にそもなにそ芙抗拒る哉　照光

人なりくハ芙抗さまゝ抗芙一ふし　一子

抗拒月見ゆへうれしさ芙抗拒るさくもなの芙ゝ哉　素迪

抗拒関や天の川　雄閑

抗尾花

うそ尾て力のこもる芙弱ものくまでも尾るすゝき哉　松江

夜の風芙抗拒ゝくり之　抗己

仇牧神の十寸穂尾芙抗拒ゝくり之　士明

陳臾風雄

柴州一の誉ゝ抗尾ゝ哉　芙蓉

ふ芙敵の仮尾ゝ抗尾ゝ哉　公

申ゝくに抗はようく染ぬ抗尾ゝ哉　覚志

芥火の煙の中に抗尾ゝ哉　公

陳はやふ尾申まて抗尾ゝ哉　登志

ゑ芙ゝ抗のさゝ尾ゝ抗尾ゝ哉　素丸

抗尾ゝ波のうねりうねりうねり　斗入

杭毛如白分之犬之毛
杭毛如馬之鬃
杭毛如豕腮之刷
杭毛如氈
杭毛如氄
杭毛如狐之腋
杭毛如狸之首
杭毛如狸之尾
杭毛如狐之尾
杭毛如貉之尾
杭毛如貂之尾
杭毛如鼠之背
杭毛如鼠之腹
杭毛如鼠之尾
杭毛如人之髮

公 松元
張云
士訓
冥〻
曉菴
岳駐
月死
道光
公
鍊凡

松元之犬毛如杭毛不
云乃以杭毛如犬毛
一羽以杭毛如羽毛
河之鳳以杭毛如羽毛
雞之冠以杭毛如羽毛
村白之雞以杭毛如羽毛
之文以杭毛如羽毛
人之髮以杭毛如髮毛
杭毛如髮之長
杭毛如髮之短
杭毛如髮之黑
杭毛如髮之白
杭毛如髮之美
杭毛如髮之惡
杭毛如髮之直
杭毛如髮之曲
杭毛如髮之多
杭毛如髮之少
杭毛如髮之潤
杭毛如髮之燥
杭毛如髮之光
杭毛如髮之暗
杭毛如髮之生
杭毛如髮之死
杭毛如髮之遠
杭毛如髮之近
杭毛如髮之立
杭毛如髮之臥
杭毛如髮之剛
杭毛如髮之柔
杭毛如髮之陽
杭毛如髮之陰
杭毛如髮之美
杭毛如髮之惡
杭毛如髮之老
杭毛如髮之幼
杭毛如髮之女
杭毛如髮之遠
杭毛如

冬芦枕

ゆくえなくしてさまよふ枕哉　玉光
寒よりも冷ゆる夜半や枕さへ　芙蓉子
ゆくえなき夢をやどせる枕哉　玉之
清つかぬ名やをとどめたる枕哉　鷺六郎
これまでに恋をしつくせし枕哉　安芳　素共
遠国の便り待つや枕さへ　橘子　国寛
枕にそふて死ぬるもあやまち芦　遊亮
枕芦のうれしくさやぐ夜の枕哉　周史
雪天に川辺の芦の枕かな　晩香
いちどやうく枕てやまめる芦の巳　自好
枕芦や沖をわたりて来る女　狂雪

芦枕

雪明りうれしや枕たつ芦辺　士路
ふうとほのめく芦の枕かな　会
枕芦のうれしくさやぐ夜の枕哉　木僊
汁てゆくゆうべを芦の枕かな　琴史
枕あしに廣うる芦の廻うれ　祥来
枕あしの葉ずれ更る夜半哉　乃二
枕あしのうたた寝ぬるき夢の跡　岳駝
枕あしやうきねの人目も枕にうき　遊亮
あしにふまるる人目も枕にうき　会
枕あしやうきねの夢もうたた寝て　渡海

杭菊　菜杭てすゝくこと多きを
杭るや菊揮をる菜の地
作らく菊ら先へ杭にくり
菊杭てそれたの脇の肘ゟ
杭菊やゆそと肩ハちら
愛のやするもるる杭　愛
杭菊や大変をて来去
杭菊や外北にかくりや杭いろ
ねをよをて変た入ぬ杭元
杭ーのゝ杭てやめそ
杭葱　葱さゝ杭てやめる戸ゟ

杭葱　悦平
杭萩　甲斐　狐子　柳起
杭蓮　江戸　長岡　文卿　祇古
杭鶏頭　晩香　蓮池
　　琅玕　遊亮
　　布永
　　樗堂
　　一栗
　　菜飛
　　遊亮
　　香儀
　　雪笠
　　勃堂
　　土方
　　愛静
　　晩香

杭　蕎　蒼耀
杭　麥　麥頂
　　　　来丸
　　　　一峨
　　　　白梵
　　　　半六
麦　　　寛松
菊　駒人　軒土
　　　　英又
　　　　大和　等来
　　　　業兆

麦　麦　麦　

その畢を渦に飛京る杭のか
文駿る杭一杭のく気おく江戸凡流
杭くや雫辺に出むる人をのお 土訪
むつまう伝や杭のたつ気 合
りるの泪つるく杭のお 榜望
屋松ら古歌河ゆる杭のか 栄光
雫ハ杭て哀漫野の息のくゆる 城英
一望名一白に逢り杭雫不 半ん
沸くや杭雫にる沈緑沈沸 ろ気望
つるく帆杭れる杭雫お 祥永
酒のくたゆ一望は 菅三

杭くてゑハるつにるれる 庚杜
餓の日にあるくる杭雫お 一学
りるやむ気に杭のく入ハお 冥く
多気しくそ杭のくふるれる 天笑
傘投てそ尽てそ引杭雫お 月江
名もおるあハ子花候杭雫お 逸亮
牛帆て杭のる集ふうりう 焼義
時に当てゑるや杭の村花 湾笠
笠さくはりに物一杭のお 雪堆
麦俳の衣日にるりめ杭雫不 一茶
白をろ尽とや杭のく立りを 平角

杉 老

にかうのの春うる林のか
のうちに嫁入の通る松老お
つ松しまよりも杉一杉のか
日暮もよう一や杉老を見るそう八
赤ゝ実のう こうもれる林のか
数ゝ一そ老貫つり杉のか
茶半の法衆ごろる杉老お
待もそ老さるれのか
武士の仮にれさ杉のか
松枚八杉のゝ栞のタかか 紀伊 寛
そうらまの詩もお 乙二

山茶花

そうらのや連句会す末席賓
さんなや学のそにあそ手
つ飛ゝやひそ一茶もひ窓そう
ひ茶もも二本八種ゆ家植お
ひ茶もやお客の養も干ぬは通
ひ茶もそうもそ度ごろ
ひ茶もの詩そ読に来ス女お
ひ茶もの ひ茶もの
ひ茶もや代 ひ茶も
白のさ老そ養そうり之

下総 鶴渡 吐月 道彦 右旗 茶也 書克 る之 昌祐 言 蓼一 僧 月渡

序花

心茶もの大学者もうう咲にたり　浜名　祇白

書見机の茅メ見て咲や梅の花　女子代　蓼連校

夢ありと咲てみきりうつりなし　蓼右　蘭文

片枝ハうそでやうし就りて水仙の未ふる屋哉梅の花

名のれぬもいとゝ老木の寒九哉

梅の花咲ぬうち迄もうう咲にたり　江戸　梅人

ちるまでハ咲ぬ梅の花

梅の花咲やこゝろの日のあたり　梅丸

うぐひすのそつとおそうに花一輪　雲鶏

梅の花一枝に教へられし　吉川　琥六

梅の花情せやし一軒屋　秋笑

乃ち戸たゝく梅の花　年仏

梅の花咲ぬうち迄もうう咲にたり　素檗

梅の花咲ぬうち迄もうう咲にたり　平角

大くらい赤ぢうちのうてり花　尾金

鉢麦の投てゐるやうな梅の花　等老

けさ咲し鉢のさら梅の花　青人

赤ちやの眠そうにうてり梅の花　竟松

なめくぢ人にもそれつ梅の花　芳園

ふり売あるく様に咲にたる

枇杷花

一枝枇杷のなりそめて
う梦もろくやたその花

幾重
方明
枝長
一蕙
長老
三位
紙雪
吾友
素孝
兼彩
良佐

八重花　雪の界のうへやはで

白旋
一茅
万和
幾重
猫そ
一柳
孔集

飛白　淵古
少年女　なる
古弟
武彦　百望

冬牡丹

角力の座を吹つて小
花咲てふ諏訪ろやはて小　南洲
奏らくなりにあり冬牡丹　斧人
妾打〻某のあくびや牡丹　發
降られて裸やそもみてゐる冬牡丹　夷吉
冬牡丹人もすくなう成ぬ　大和女子代
冬牡丹ふくらう吹きう支度哉　楼竜
長生をやうくうと咲る冬牡丹　素
美さをそれ切りぬる素牡丹　る市
沙金もつかぬ吹ちや牡丹　祥永
冬牡丹ふくれおらみてくれろう　日化
冬牡丹人　斧人

茶花

冬牡丹匠よりとる櫓の角下
冬牡丹西人をたのくれ咲ま
茶の花や月なき夜みそ覚束な
茶花にたくさんの虫の鳴集
丸〻く茶の木の花の咲ケり
茶の花門の垣ある宝て来た
茶花のおハさ白の句ふ
茶花にまぎるゝ流るゝ
茶花をうくして花の流ケり
茶花や貧人のうなぬ句ふ
花さくをとりえにおくや古茶木

五麦　物慶
発市　自牧
盆栽　士朗
合　跡六
摂竜　大阜
道光

麥蕎冬

麥蕎

冬

麥蕎

麥蕎

麥蕎

氷魚　道喜
紫淸　公
衣具甲　古卵
竹筒　愛々
教あもさし　越中　此方
よそれなりあり　乙二
よそれな狭俗の　京　京人
よそれなや折くる　加賀　美女
狐犬を追の　稿子
栞や夜興引　凡律
　京　二柳
　蓼太

折ふしてくる手ごゑ
うそ人の夫仕や
ものうたきもの
若い代の急ぶし
閨のあい女房
松ケ枝も
うそ乳人の月
おくれ声
世の中へうつ
大哉のよう
や机のかれ
　北谷
　三考

柳花
英お
会

廿七子代
黄吉
暁会

白妙
多磨
几董
保吉

武吉
不的
会

琢石
狂九
会

琴道
湖白
士朗
会

捲堂

吟ぬ来て降ぬ月のよるれ
月うけや業のうちより礼皮よる
入日にれ吟るすうよるれ
よるる夏やす耳九入親の暁
兄高一芸をれハ立よる
吟るよるそ一ふそ廣一
弟櫛を流れすれる文よる
松系やるたおれてうくちう
翁うるてすこぬちりれ
孤岸のすけそおさるか教御
川よる牛の暁そのうりり

○卅七

仝
長製
玄篁
道灌
朱六
詠所
業乱
業飛
仝
我英
仝

流のよる月のよるとおれり
文よる吟てこ疎のうりれ
おうやうれおうりねタよる
むつりやよるる命の三新氛
人化年のそやう濱よる
そ三月お角あへ濱よる吟
よるるれ化のすの玄つくあ
散餘も二三度ほるよるれ
吟よるおさ八年のく風雲るし
入ちれ吟ふ海とのちう
海化のやよるる吟年と等称る

子孫里
仝
菅三
一年
平角
乙二
道老
仝
月乱
仝

波に入月乃てる
小夜ふけて磯うつ浪の
皃ハ海つらやいつ
おもよハめるとおもふ
曙や岡に死ゆくちり
おもふらんそうてゐるちり
あるたつや春ハ
氣色の流もてゆく
らるに春をもとへ鳴鶯
ゆるやうもの戻る海よる
恋るも抓よる鳴小夜よる

蓑虫
火桶
蜆蒔
尺艾
素藥
月代
雪梯
梯劍
學生
日人
壹人

たいさう肌湯手
春のうら肌に
紅の抓をかけて
外梯にふるう
あれくのふるに
業刀に世を
子郎や笠の上
田の畔に一本
松風をいる
祝ふるあも
湯桁や作りた

寒杉
養生
蕗白
護物
少汝
幽晴
快氣
漫々
女志宇
一華
素院

立秋を吹入れて吼るよる
月にさへ老ぬおそろしき海よる
吼つれて引ぬ夜るのかりうつし
起ら清のてりおそ
声の根を尋て吼ぬ小夜よる
かなもあやるをそろしあり小夜よる
気をも吼にさらやるよる
よるるうたりうたり山の白
兼たけ八演のよるうふも来る
海上の大机を流れよるわ
吹先のゆく不やそろくよる

能勢の可十
鳴雪
赤坂石垣
不貢
信濃人菜
智至
信濃桃園
来桂有
かたく
茜麻
古翼

そこう火の松に及て吼るよう
豆蔵をたく火のやう吼るよう
あり〳〵や夢う蝶あれかよう吼る
よるさうと楽たり沖へ舞う松子
まつて月に流むえびつつ
蝉いえやのたたのりいつつ
うたりれうく箕るし苦れ白
拍子
放参やたい花ふいつつり
乱髪に駒の息いつまて
駒をし参やの乳いつまて
駒うや海洲しもたつ撥

駒ようるこのよかのはおくし
駒のまし参八えんこ
りの出やの気よう
ちうこはようこ
駒うくや参のまし
みの人の駒に及
三人て一本傘や駒のう
駒うく中烟管
乡風や浮蝶を
我気ある気ちう
月の夜をするう

蝶死
菊明
撫虫
先直
業能
城吳
会
神来
の欲望
造売
乙二

小鴨

谷
春の閑
寒松
年比
漫々
梢岡
何竟
詩嘯
頌陶
城硯
悔平

（懐安）
久聚
英勉哉
倣己
去帰
覚来
花縣
橋東

小鴨ともよそしくも馴るゝ
かな昨日まで浪のうへを流るゝ小鴨
乃ちまも法のそのゝ小鴨
月をまとひてたゝよふ小鴨
池鴨やうらゝかなるまのよ
をまるくやはらかに寝る男
星をまて古巣をいでゝ
をしへなき書うなもりもうもり
夢ごとにうつゝの世にも
をしへなき人
をしへなき
大江丸

逸老
白塘
樊白
子雀
梅屯
白焼
尊称
保古
人

礫にそうつ浪のうへ人のかな
をしへなき人のうへ
をしへなきうつゝの夢
をしへなきうつゝの世
山もの柿のおのれおのれ
そうれをしへなきうつゝ二ツ
をしへなきうつゝの夢
をしへなきうつゝの世
をしへなきうつゝの世へ来ぬ人待夜
をしへなきうつゝの夢

雲竜
烟丸
梅屯
月香
尺笑
笠〻
我陵
子人
馥岐
義梅
竹頼
士深

繫維

水

春江雲香
未共
飛雪亂古
越谷敬之
仙阿
江川
下阪三止坊
洋谷る次
夢か
会
周文

燒香
会
保吉
岱典
玄的
一学
遠光
雪焼
鞠風
春岡

[illegible]

[illegible]

[illegible]

松井に打もられもいれすてさふらひ
砂にむさぼりて通ふ蟻のそさふらひ
勢急もさのみ急ぐ事もなくてさふらひ
木の巨の蝦もさのみ急ぐ事もなくてさふらひ
大なれさられ分会ふりみてさふらひ
手鞠ちとしてもいふ事ふ
なそさふいこけてさふらひ
これなれさ考ハをそこそさふらひ
こそこさふいふ傷足つけ寿し
集を参れ分ふ拾れに来よふこさふらひ
松ふされふれて来へふこそさふらひ

我笑
主方
連歌
道竟
月化
一葉
等等
末満
事前
宗人
梅僕

ふりハそて来ふこそさふらひ
急れてもふのつ仕来れこそさふらひ
文ふふ負を表ふそこそさふらひ
こそこさふいふ急や一尺ふ
勢ふの集売ふ急こそさふらひ
小袖ふのふそこそさふらひ
ふふ後や頓ふこそさふらひ
二度ふれふいふ急こそさふらひ
急つふや急の様こそさふらひ
ちさふのふそのふそさふらひ

万和
教長
某竟
語老
食後
女き
宗扇
宗臣
右民
晴二
万波
花筵

拉洋みのものやうそそくい　　仙支
箕をうつ秀人のそそくい　　上総　秀人
ゑそさくいの強いとりみそしき　　佐渡　不揉
優ある美をそ経ひする吉か　　関足
学や美をれてて就をよく　　一笑
さくいや要れをれる人林の奥　　安芸　拙川
くろやをれ経よりのある　　京　可南

椿五古弟輯

雪　　春雪のいてつかり一田つくれ　　春海
雪のれをれいて雄をる人化さん　　松長
しもやをて雄をる天の河　　海南
雪のの記をる百もろうそう　　子宿
しもれをれる風れくこ就か　　信仏　南雄
冬　　本をの語もをてをるの日　　美古
新をつも地をを張ををれ　　華水
雪のうろををれ　　几董
柳をるんのそしもをれ　　飛美

猪　惹　猪やよのそ屠ら死ん
野火焼　は火焼や赤もゆりそそ哀
吹葦条　れおそやくみハ汚ら井の哀
　　星芒に叡の雁治やもみ
　　夜掠の古刀うつ吹葦の条
子　条　子条や井代の前の飯蛍し
子焼ん　子条によごれ群れ松の指
井　楽　敷肌や焼ん去のかれり
　　はらそうを整ら井ら井の赤
　　赤井まや枝をし

子星　子星
夢赤　夢赤
一学　一学
一星　一星
陽写　陽写
和ム　和ム
月花　月花
道産　道産
赤新若　赤新若
九華　九華
二柳　二柳

赤井ま や押ね気ある笛の書
歯のそうを乱てめそた井ま
子ゆに条のうらうらうら
古部吉の敷うつ星井
世ろうよ族の中星井
素に哭一児にあ気ら星赤
学る関てまやそ星井
そ世号やうらうら星井
そ也哀夜ぬ学ま
そ世号やうらうら
赤治する小乱も
汗　玖

探美
秋夫
乗乱
暁条
月化
素術
鈴鏡
麦宇
一醍

陸奥　三星
夢赤

夜に来たる雪あり浜や	会
木のすゑの雪も有り浜や	会
雪よりも有り浜や	蓼太
煩悩のおもにふまれなまちや	晩学
まちやそれの思浜や	会
先ず雪の前しまうてまちや	樗良
川添や木履はそうく浜や	白雄
雪さらくれ浜や幸いまてまちや	会
浜や老の力のありくけり	春蘭
仏るよ女のつをまちや	保吉
浜や雪のうまれて出るまでまち	大江丸

会	冬
会	冬
会	冬

そのこゝや美今まして淋ㇾ
あれ木枯を注ぐ戸いと淋ㇾ
拙家一枚の夫も淋ㇾ
丁明の中をのさく淋ㇾ
ずさくまれ花に死ぬ事も淋ㇾ
淋ㇾあるあれやこれに
淋ㇾ芸必て尽ㇾ
夢い拐ㇾ恋ㇾ拐て淋ㇾ
淋ㇾ仏あり行ㇾ
淋ㇾ是の元い
心道や有ㇾ

合一字養机奇関道意合
雪笠
寒く
素梨
堀義
拐也

あくく横長淋ㇾ
淋ㇾ秋のまの
関をてもれ
秋の底たくいて
淋ㇾ花に淋ㇾ
整利て逢ㇾ
暁にうく
美釜ㇾ
そのくるの
淋ㇾ淋ㇾ
月に吹るの

長松
序人
五

養ㇾ
笠高
相ㇾ
木序
女蔦く
武美子
金児
著井

大師講

陰仏事

雪

海山の美の字格よくうつり
二度三度月も雪も海山
くもりそめハ海山
村園を取そめ海山
海山まで染やおとろ
海山を分て遠近
孫宝殿一枕方の詞書
雪やかるる人も有
人を見てそ帰りける雪の下
流れて浮のこる雪の塊
雪雪の清り新の雪
積れ雪おくれ有のあらハ
雪雪や仏にされたる法の末
雪雪に栄ゆる花の寿
末法もさいはひ有
大名もさいはひ有
走らをりふしあるべき雪の頃

元禄 平之
寛政 五有
陸雪 三己
乙丑 霜月
写雪
道雪
寛保 壹年
一万
風至
晩雪

楊充
白楊
宗像
保吉
公
感吉
年入
姫也
業北
成美
萬三

雪

雪ちら〳〵猿にこたふるの雪　　筑波
止む外やそのみ越に嵐ちら〳〵　　伊豆　美砂尺

折〳〵その降る折りや流の芳
雪に折りて羽幸ちら〳〵松の花
鬼歯朶も巌陳も雪の上小
鉢雪やよう舞ふ所ちら〳〵風望
飛び〳〵松もその雪の夜明や
旅人の捨〳〵笠うち覆の雪
鉢巻や外も雪の下
鉢雪や笹にちら〳〵松撓
鉢雪やみ詣ちら〳〵雪ちら〳〵人の雪

雪

鉢雪や求食てよこす路の後　　井る
鉢雪や麻の乱れあく除ふり　　ちる玉巻
生ちら〳〵亀ちら〳〵や雪の朝　　白年
鶺鴒ハ鉢起るよ雪の上　　慶戸巴秀
降〳〵と柳の雪の陰折ふ　　鷺雪
雪呼て覚れそうに時折ふ　　公
雪の秋やなのそよ根の下　　伊豫　蕗牧
枝に小鳥のそよる雪折ふ　　存亜
ちら〳〵と笹の雪折ふて雪折ふ　　狂九
雪の秋の嵐事てふ乱折ふ乱　　接先
うそり出て三年の巻も雪折ふ　　城笑

雲

落

柳士矣の落中雲の打く秋か
湾月のちんさく雲秋か
人くのそさろえうり秋の雪
落つ矣れ哀れ雲の打く秋か
落のす業を雲の肩そ
唐さても関こさ業の落
雲松
きくハおて遥うきの雲松
鈴のつそそる雲ちら
雲亮
すそくをして雲ちやそ
雲の人ゆやせ雲ちやそ
業を業に秋あし鈴恵今雲のる

松江
菊壮高
綾な柳業
関更
白落
月化
白晩
上臥
来今
秋長
暁亮
辻骨

雲の秋や天の川さそ成る
了うもりれ栗々雲七秋
孤のそ雲秋ハ物を当々
臣角の実のうりこと雲秋か
松蓮をかくれ雲の雲
すんくと業ら秋の松
鈴々り起てみちし雲の亮
雲の秋の二万秋くりり折か
月のちて唐くりり雲秋か
船に寿ることりれや雲の雪
亮うりし亮ある雲秋か

冬亮
秋亮

白塊
芙葉
九竜
仝
岱き
琴石
る孤
大江九
春亜
垣也
仝

旅号
吉川
帝言
丈方
士朗
楼宅
仝
玉箒
仝
紫兆
挿天

ゑ

ゑ

ゑ

残燈てすみるし雪のいとまも　陸奥　岡虎

夫雪ふりとまりて武士　鶴子鳳

月雪の外月ひとつ入れてなし　月圃

月雪の物さびたてる風情かな　士朗

月ふる雪の折しもうつくしき　仝

月雪やふもとも未の生をうら　素卿

月雪も村のうしろや竹ばやし　桂里

月折〳〵あるじの酒やうらむらん　万和

月雪の来たなりにのかおかし　蒸白

つむ雪のこれやこの月初ふり　志宇女

名のそれ月初ふりし雪のうら　前玉

大やそれ月のいつる山かも　亡父園国

月雪ふりつもりもかもかの木　尾張　牛来

雪積てそこともわかぬ野の末の　江陽

月雪の深きあたりの一方や　久敬

雪深き人の世すてん捨てん方へて　覚志

月雪の寄りふしぬ一ツ　摂　白花

炉ふちを押へつゝ深き雪かな　白花

大雪や笑ふ一人のうらめしき　順九

雪ぞ又一人ほしき角力元　梅仲

積置し人ごゝろ見ゆる深雪かな　玉蟾

成美

ひ

大雪やわれて子規　傍枕雲雨花

大雪のよに立ちる月の氷　野秀

除雪のうえ日のように都ひ　宗雅

大雪や君が来ぬ夜の独ね　未湖

雪つむや君のこぬ夜のくるおそて　孤ひ

有名とうるの事ぞ冷雪かな　大ゐ

つりくてうりくおんな材木　猪子

ひ道の山ちらばらばら雪かな　挑峡

つむ雪の跡をもとめし乱れかな　指峡

うめくと降るぞ雪のひ訪れ　下弦

ま行気の病に籠りて雪ひ閉ひ　蔦助

人のいへる都雪そ降れる　鐵船

ひ降やはを地方を抱ひる雪の気　斗入

雪ひの雪見てをり傘の白　書狂

雪やれて雪のさはつてもやはらか　士朗

夜雪の除ひ擦ハうるくあれ　石二

万りの雪主雪のひおれ　尊流

雪ひの窓そうやや雪のひおれ　田人

雪の列やうやうむくまのふり　警笠

大雪やれて雪のふりおれ　陽子

雪のひ越るんでる気ハちる　武陵

雪　雲　林　野

雪　雲　谷　林　野

雪　雲　谷　林　野

雪　雲　谷

濟るてふ〻〻むかしの秋

盡 雪 郭公なくこゑ尺八の雪

雪晴や雪のうへ行あとの雪

寒や雪のふる枝のふる雪

川 雪 はるゝ〻と流すそうず雪の川

雪の川世にのこりたる曲もあり

ゆくをいそぐそうず雪のさゝれ

川凡のそうず雪のさゝれ

石 雪 雪の石のあへ花力新かな

笠 雪 古笠や葉ハ雪ながらおよび

雪ふるうしろ姿の雪

雲織 雪

雪の温泉

玉光 雪

陳臭 雪

英二 雪

長翠 雪

年仁 雪

三十雀 雪

聲堂 雪

柳月 雪

雄風 雪

雪 雪傘の下も旅之宿の雪

雪 凡雪ふれて死うそおもふそ雪哉

いさ雪ふるうちはうき義と笠

ふる雪へふれ〳〵雪の眺かな

公なん凡雪そ雪ふれ雪凡かな

一人つゝふるそ気味雪凡かな

雨人にゆるす雪凡かな

雪の雪凡雪かな

雪 雪手や七ツの雪を分のひら

雪 えう来て大ぶろしきの雪仏

雪 雀の来てふかぬ笛うそ雪仏

朱亮 雪

樗良 雪

等躬 村

摶堂 雪

の新望 雪

公 雪

月東 雪

陳臭 雪

月檀 雪

亦東 雪

書架 雪

幸	氷	浦舟
幸	吹	沂風
		芝村
		考名 阪多
		保吉
幸	凪	乃亮
		紀伯 浦舟
幸	当	白権
幸	車	書哥
		姫丸
		京人

幸氷引き込むや星のか
幸姫や燈へきまゝよりろり　昌子歌
幸竿　流れ行くよりな旅雪　井六
永　芙蓉まや水の上の花小永　芝村
　歯黠にかのふ下戸ハ志ら水味　百舟
　新の清に水ふ菜屋か　百権
　落こ戸り白ふ　公
　水ふ芙ゝに通ふ之
　そのふかのて水ふ屋子履
　流ふ来て水を叩くゆへか　書蓼
　　保吉
　　然吉

冰水　大和　林糸
翠氷　陸奥　治橋
氷花　寒松

池くにうめてあるる氷の氣
江の底の氷曙ふる雪小
糸やや木くハたひらたる氷
数のこのこの不思に星ふる
氷花　漫ありてつまそて尺ふる雪
ひと雪てハ入りのつらふ小
水の出の出ある水相小
いく筋も氷波ふる氷相小
結代てうたる氷のふ花小
氷の岸氷越ふる氷ふ
井桁のふ花ふるる氷の表

雲水　同　清水
氷花　同　清水
清水　同　清水

雲ふ人ふるふ小
焚ふて浪井ふ底小
氷花ふの底ふ雪ふ
葱賞に出ふ不思ふ
こふ〳〵三月底ふ
氷花ふて出ふて清ふ
ふ河不意のふ
もふ雪ふて出ふ
清河ふ和ふ嵐ふ
松井に河ふ清ふ
ふふ氷ふ

寒松　雲水
扶蓋　同
月筆　同
白雲　同
南陽　清水
大和　左會
保保　清水
女たく　同
清水　嘉林
筆の　再可
白雄

霙雪のふりつゞく頃 稼おも
禁凍てうるおひ 雪のやみ おも
舷海に押あけ 幷子の小舟お
浅る苫や一ふしの 風のまう
木もまばらや 霰ふる 後洲こそ寒お
古沈に雪霰 後洲こそ寒お
笹のおもてを 打れつゝ 寒お
ひまもそこや 魚の背も 育お
人こゑをいそぐ 長わらを 寒ふる
こそこそや 雪に埋れたる 小笹原

保吉
人
漫画
去卯
摘月
芭村
蕪吉
白雄
保吉
春鴬
道亮

ゆく海老ハ寒の名物お
さゝゝと 窓より 雪のやみ 小豆粥
雪ふり 雪のやみ 寒ふるの 良
あるうれ 霰の 寒ふる 寒
業汗もその 寒ふるの 良
雪一ぱい そそる風 寒
寒八画にて 寒ふる 寒
雪ふり 雪のやみ 寒ふる 寒
雪ふり 雪のやみ 寒ふる 寒
その後月 寒ふる 寒

未蘂
雪笠
竟松
蕪吉
光朔
雛丸
長秀
古狩
都丸
晩春
仝

一ふそう矢船のそう舞
ま舞源毋う鴻を礼まう
関の戸や舞と舞す漆の上
残る木舞と舞す打ぬひ
小夜舞やハ忘れて吸月の
影鴻の尾れやうを礼や舞人
まうくまの底る舞ま
ま舞さてまの底るあ舞
吸やんてれ忘するあれま
メれハ何もう千う舞ま
こ底るまのくまたーみう舞

海村
公
園立
与種
保吉
与舞人
士的
公
子共
一子
乙二

高うて打ち舞ま
舞ま舞のうあ千ハ底まよ
筋鳥う巻ま舞底う舞ま
鳴ん尾吸立のまのれ
まくの底やうもうま舞ま
ま舞旨のかま連て来ね
りくうれま舞そり舞ま
れこれと未ま立を下る舞ま
松うれ舞ま底うれ
うくうれ舞ま舞ま
立尾をうくやおうう吸舞

公
遣売
志迫
日人
月化
一業
養う
彦人
雄測
舞乃
又角

手り喰はうと爲し女子 春竹園
勉強する人に喰ふと爲し 山邑酉湖
下駄等う賣ずる美喰 美吉
美喰ひつゝ美喰 九華
業平八男うと美喰 支國
つゝ美喰も美喰 掬水
掬一ぱいとゝ 花枝
うと別書 松堂
よへまのをまれ書 十丈
をまりの樂なは 蘇堂
書まうへうとゆ 無名

雜卵汁
七菜汁
書まう湯

脫
脚
書やけ
水源
擽
ゑ仁

孩やせとあ賤のひうをず
あうとや書れひうれてをのと
元村やうれうとむうる
擽をおうとハまやぬ
ゑ皇やまをうぬ
うとゑ京うハまやぬ
城うとや擽のひれ
ゑ仁やまうとそれつや
ゑ仁ハ名うとつめうとそれ
ゑ仁や赤の学書衣吸ぬ
ゑ仁や赤れ白まのまれハうを

春治
大江丸
保吉
山川
呉築
春琴
白雄
女子代
公
蓼村
蓼吉

き菊

多仁の菊を多仁の菊と咲てあれ共
多仁や菊ハ菊と咲てあれ共
多仁や菊ハ菊とそ咲ゆふべ哉
多仁ハ菊ニて一度も見ず第一
多仁や大仕合のきく
多仁ハ作りめ咲てすの
これ咲てすの作りめ咲てすの
多仁や菊を作り咲てすの
多仁や菊ハ作りめ咲てすの
多仁や菊ハ作りめ咲てすの
多仁や菊ハ作りめ咲てすの
多仁や菊ハ作りめ咲てすの

於多仁
春亜
遠境
春雪
一字
一茶
竟松
定人
菊也
雨考
まさ

き菊

多仁の菊を多仁の菊と咲てあれ共
多仁や菊ハ菊と咲てあれ共
多仁や菊ハ菊とそ咲ゆふべ哉
多仁ハ菊ニて一度も見ず第一
多仁や大仕合のきく
多仁ハ作りめ咲てすの
これ咲てすの作りめ咲てすの
多仁や菊を作り咲てすの
多仁や菊ハ作りめ咲てすの
多仁や菊ハ作りめ咲てすの
多仁や菊ハ作りめ咲てすの

於多仁
春亜
遠境
春雪
一字
一茶
竟松
定人
菊也
雨考
まさ

石蕗花

雪中梅

早梅

冬梅

雪ふかき梅の枝ゆゑ蕾ゆるみて咲けるもの

ちらされて梅の
空の人をそしる梅の梅
き 梅 信
き梅や雪ふりつもる花の上 同
き梅やまだ折そめず老の肘 之
き梅をよぶ折そめず老の肘 吉
き梅を折の袂にそふ乙 お
き梅や乙のうら流む女 斗入
き梅やまの小牡連 宇
きてふれてきく梅さく裏の光 春
臘梅 梅 哥
臘梅集も咲て庭守花あれ 常陸 素

き 椹 き 桂 き 桂 き 桂
きれて椹を 椹 花 椹 花 椹 花
きれて椹よ 片枝ふりし 枝の花ちる 椹の花ちるや
義先ようこそ 月や梅の花 ちるや月や梅 実平のもとにうるまれ
へこれに咲 ちるや梅 かれ
こそうゑて 花そうゑ 実平のもとにうるまれ
きうゑて 梅
きれにかゝる 名所 海石
き椹雪を 片枝ふりし 緑石
片枝ハふり 月や梅の花 陸奥 歌
月やうき 花そうゑ 大江 元
花そうゑ 実平 老 躬

鮑の蟲や	森亜
餞なき人と	全峯
ふくけの	布永
旅人は	業旭
君が代や	成美
河豚売の	仝
純うれて	一茶
こいその	道彦
河豚のつら	仝
さく梅の	等元
待ちわびぬ	養之

雲ふくのらを	一茶
みすまして	仝
飯売る	尺艾
捨られし	寿圀
ふくや毋	百池
月もの	護施
飯のこ	放牛
飯ふく	来亭
然比丘の	栃翠
飯食ぬ	玉砌
ふくれて	仝

鍛　鍊　あんらんまれんか　周防　渡邊

錬　いあや鍛錬むよもるまま　武州　乾

乾　こ荒一この砂よ　善村

鍛　焼や錬の乱る雪の　樂毛

太作う画のみ砂ふう　本多

錬よるまれおまたくまれか　村又

明の滝退午鍛れるちう　二階

うまけやこあて尺たるの見　尾張　等竜

か鍛れ勝すまるう　善村

うま鍛や常力夜の毛　仝

うま鍛やまう末の午ハ解よ　周吏

筑鍛のにハむすはめまあれや　白樫

うま鍛れ小町の宗て村まま　保吉

うま鍛れ名刺の沈るうう　九華

うま鍛を要しのまれ美へう　手摩

手鍛にれたまるう　狄当

うま鍛れ凡情ハるも共る　蕾二

うま鍛不思焼まてわ業　美く

うま鍛をまうて仕舞う　遠秀

うま鍛や刺支夜のさうして　月化

うま鍛の手うまあれ者ま　亮和

うま鍛のうれてまれるれや　渡邊

鈔

牡丹魚

牡丹魚

麝

うつ蛙をうしもおまる氣かな　蕪村
うつ蛙や老もそゝめる鳧そら　石海
うつ蛙や柱たゝきし人ゝ　奇人
いさゝ妻つまやきもつまうり　梅僊
老坂の附まもるひうかな　白雄
なれわる花なれ月なれ　伊勢　古濱
牡丹多見物のすゝろ袴かな　蕪村
うつゝなき後姿をしあれかな　麦洲
かうべなき孩子をかゝへ　元多
魚桶やうつゝ芒をうり　雪雄
うつゝ来る麝香を抱て　白雄

麝香猫

麝香猫や苔ふみ分てうつゝ来る　白雄
牡麝のうつゝ吹ちる庭のもみ　平角
麝香猫や君まつ宵の月いさよひ　美古
秋川に吹ゆく雲の武者ふるゝ　八〻
麝香猫やうつゝ吹ちる庭のもみ　大江丸
麝香猫や苔ふみ分てうつゝ来る　花顛
麝香猫の歌仙と巻て一夜哉　洒竹
麝香猫の古き硯と巻れけり　乙二
麝香猫のすんで出ぬ夜の月　学笠
めゝめるゝやうつゝ来る夜半の雨　秀圃

寝多

大根哉　ふハかる大根ひくてもハめぬ　也有

引すゝむ大根の手ぬるしかな　白雄

ふる雪を吹方つゝまて大根宅　几董

大根引て松ハ有明の寒さ哉　朱英

出明や幸もおもや大根引　仝

上廓のうてゆれたり大根引　一茶

寒ひにくるりおや大根引　蕉肌

うつゝなきまをまつや大根引　道彦

明の雀や大根もそりそこ　一茶

野のくれてあるう大根引　歌女

散ちかくおゝ大根引　竹居一考

冬

菜引

大根引菜ひきも妻て佐舞ケり　芝夫子代

松ハ雪菜引ありし方ハ雪　素檠

美人のうつむきかちに菜引哉　竟松

うしろひりて菜引つゝ去　竟松

ふりくるそつゝ菜引の笠の雪　完和

たゝずんで晴るゝ空や菜引哉　業石

越業して世をすぐる縣かな　竟志

日ざしてあるく道ケ原かな　白雄

菜引ぬ山里ふりて又ふる雪　芙葉

さそく折もふしの菜引哉　有瓊

一茶

大根哉　ふかる大根ひろふてもかぬ　也有

引すゝむ大根のあとや雪の山　白雄

外ゝ見を吹ちらしてや大根売　几董

大根引て拭ふ雫も冷ゝや大根引　朱英

上腐のうれてゆるしや大根引　召波

夢ふたゝるゝ程や大根引　一茶

ゆく雲をつなぎとめたや大根引　暁台

野のくれやあるゝ大根引の跡ふたゝ　遊竜

ぬくもりおかし大根引　作佐一考

菜引

大根引すゝむ雪の山

松ハ雪菜引の人の笑ひ哉　也子代

美人のうしろむきつゝ菜引哉　素檗

ふりかへりてもとの菜引哉　竟松

たゞそれ〳〵と菜引哉　完和

越前にて菜引の頃や雪の山　業石

白雪にて菜引の頃や雪の山　竟古

望月の山里ふかし菜引哉　白雄

さゝやかに村もさびしき菜引哉　芙葉

菜引の子に有明の月ありて　宵嬰

一茎

葱

心のとや子葉分けさらし元角
葱雲みて林未の中を降る
葱とりに関もやおもやう
つめさき物うき
かみそり
小武弟
人中へ
葱うり
元祖物
孔子
生姜姫

吉百
蓼村
春湖
鉄船
保吉
士朗
双樹
道亮
岳船
庵人
武秀
乃治

浅漬
凡兆
納豆

洗濯の歯に透る男かな　蓼古
ふるさとやうれしき事も
献立実のいる頃を
入江のなどまりも頃を汁
うつとうやうて交りり
人も合当もすり
なるこも楼
花ちる桐すり
うつとうれた実も汁

古卯
来の
夏椎
蓼村
年仏
道亮
自晃
養乃
季角

銀河落日悲壯を下

師走

うそさむき師走の空の
朽葉のせて立ちさる
浮雲をうつす師走の
池のみぎはの不時の稲すゝり
百姓の板戸反りかへる
さらさらと葉ずれの
音もまばらな
目白をもとめし
美しきかな

枝ふとき芥子

擬宝
珠高
き
芝村
自慢
の
八重
咲
芥子
の
花

楓

八

竹垣に
車初
もみぢ
たての
雪も
於是
らくやう
楓八
楓八
楓八

九仏
筆の二蝶
美曲
屋人
合
可慶
亜笛
関文
合
大睦
白雄

仏名会

寒

楓八
楓八
仏名
仏名
仏名
仏名
仏名
仏名
仏名
仏名
仏名

の等
の面の
花を
数
心
文是
宋英
等宋
仏凡
抱誠

越中	吳吹
同	袁鴻
同	保吉
仝	
羊入	
有亜	
松兄	
士朝	
樗堂	
仝	

仝	
業兆	
成美	
仝	
菅三	
圭牛	
乙二	
仝	
冥々	
學笠	
仝	

入川のくし
んなりもるる
のようるの
狭うるし
為芋服る
年のそや
皆のか
川まる
あるもし
初めのそれ
そしてそれ

寛松
美う
白魂
武陵
月魚
久賊
文角
尾張 我亮
素撲
月松
沙主

題叢冬

そ
そ
そ

落ちの本履のるすそし
梅もう浜笠
木城るん
それい小
丁鴨れ
人まり
そそや
そそや
そそや
そそや
そそや
そそや
そそや
そそや

素布
信安 呉峰
一嵐
青竹由
久光鹿
伊勢 風兮
兎亮
乙二
一峰
鞠先
七夕
芝村

冬の籠すたれ人別のより　　冬籠
心の発つまめかれ
冬のされ仏西さし菊深
冬の扇流の青き筋しさよ春氷
冬の雷不断のうなり雲
冬の雷不利刀研し作男
冬のおやたてそして吹沖のより
冬の雷不吹のえの犬のより
冬のおやとそ吹て月光
冬のおやもあ古冊子

冬ごもり　　冬籠
冬のおやけ吹うたう松風より
冬のおや汁実吹うたう尽
冬のおや吹うたう白のる
冬のおや下駄をる流り
冬ごもり吹うたう月の花
冬ごもり嵐の乳房の雪
冬ごもり嵐やかう月光
冬ごもりの世へ大杭吹の私
冬ごもり幾人へうて吹うたう月化
抜うう月へうて吹うたう雪
冬ごもり抜うう月へうて吹うたう入
冬ごもり抜うう月へうて吹うたう汁

小窓寒

冬夢

梅の木の下に筵を敷くこと也
遊業の先生のこと
梅折り
こと
葬の夢もそこに
等の人
そこ
そこ
そこ
そこ
そこ

立花
天竺
櫻堂
公
成美
義堂
春牛
一茶
負兎
公
冥々

施主等に渡すこと
杭杙や木
そこ
乞食の集
ゆく
人
そこ
大杭の
墨
永
そこ

魯哥
李剛
一茶
寒松
斎人
秋華
江戸
岡甫
梅塵
業山
女
花弄
九仙

冬

雪まろび折しも梅の花　浅渕　長武
冬ごもり美江戸折しも梅の花　江戸　作郎
自然情を宝て櫻木立　覚意
冬の日の山寺ふもと閑古鳥　美香
冬の日てるもみぢやま白雄
冷ゆる夜の波治の森笑や　桃波
冬ぜんる乳もうたゝねの日　伊勢
その雪の月うちれさし心の上　岱書
冬と云ふれあるその日　移石
櫟やさゝらくるもの日　保吉
大内裏一詩代うるその日　順九

呉しうまようかれそのの日　公
あるまでに閑まおたりその日　士弦
さりくと告ふ心のの日　公
さまくに波あくそやその日　公
百人うその嘗ふ波よその日　有心
雪月いうるうるそのの日　櫻堂
冬の日人にを退て都へ　尽
掛うも掛て尽やその日　就員
ひあ尽しをふ松やその日　公
うまを井小郎特尽冬やその日　公
我うの宵峰やそのの日　某

長すこしそりて小さしその月　　道彦
吹雪や雪をもあんそその月　　寛松
冴え渡る林一村やその月　　等窮
うら屑の月すさまじうなるそその月　　公
楊の雫ぞしぐるるそその月　　桃重
ありあふ人をあつめてみるそその月　　菱守
簀の末に曲りそうそその月　　斎人
月走つむかいおりおりのその月　　卓池
ふるものこそ恋しけれそその月　　北汀
暮ぬして木ぐれするそその月　　蓑重
旦く　　

あるう雪を提て垂そその月　　露元
すまひや男の月もそその月　　湖中
懐うう新発のそそその月　　流觴
いかさまの花うたれそその月　　素月
雪ふとさらばほり提てそその月　　女渓藻
雑把にぬすしとぶそその月
月代そいぬかのうそやその月　　る之
多くの月うる歌うり乃うれ　　指月
多くの月うる歌うり乃うれ　　朴吉
多くの月うる歌うり乃うれ　　双雪
多くの月うる歌うり乃うれ　　菊渓
多くの月うる歌うり乃うれ　　春成
心足やつうり雪のれそその月

冬　九月

花ざかりもすぎぬの月　秀九

葉のそよぎ嘯くその夜の月　雲漢水

見めぐりぬ未之月の月　桃廣

殿守のそなれる色の月　甲斐鶯蓑

そのままに月にもさしぬ手心の上　方流

その月名もうすき淡のそさぬ　江戸茅舟

世すてびと養の月　永

あら海にそそやされてその月　雲妙

松るるやや入浪その月　橋中

月さしこもる安芸の宮島　晋永

さ月此歌にうたふる竹うれ　亜栗

冬

水破りて池之氷も　人

さ月や桃李老中の井三笑　芝村

さ月や誠もつゝめくせ雑　白雄

さ月やうそもまことの角と角　松翁

さ月やそのまゝ通る　大江丸

さ月や柳うそにうたはれ　士朗

さ月や月代青き男ぶり　向角

木優

葦消

成美

さしのや生ひ楷の枝つみ　　如泥
大そや八月ふしおがの日　　一葉
さしのやるのうある神供風　　雪顛
さしのや垂香ふる筆の吉　　宇洋
義人のやさしき机の乳　　車両
さしのやかもさぶる林の乳　　詩眉
さしのや案山の筆に　　倚斯旗
おうとりをとるや戸口か　　女奥衣
さしのや夜にうつる籐筵哉　　楷雨花外
人今をとりのさし　　吉節
楷色つるし　　晩春

楷の花
楷の木やるにて楷の枝の花
道中へ今さし生ひ楷木か
浮世絵の人も楷の着
楷の実の黄つき楷のあるか
松ひにかさす楷の古畳
楷つむや楊子の上
清のや義や楷の流る
楷費て義経原か
黄ばみの楷も八九尺

白楷
保吉
春亜
乙固
胎九
猿方
るり
楷堂
公
巣兆
一茅

炭

炭竈

楢の火やこゝろもとなくたくらんと
楢の火や月も雲井の夜ゝ乃氣
楢の火やまだ半の夜
楢に寐て居れかちひさな嶽か
楢柴ゝやかれ葉もちらぬ
年ふるは吹あらしの楢のもと
松風の夢をさまして楢あらし
ゝゝのうき沙汰ゝ楢あらし
すゝやめもあれしろうら
炭ゝやまた一夜は殺て居る炉
覺ゝやと言ゝ殺て居る炉
伊勢

楢重　一茶　誓笠　寐松　来年　枚枚　慶英　家古　月桃　一茶　道竟

炭

覺ゝやと言ゝ殺て居る炉の小窗もうら世ゝ
覺ゝやなゝ殺て居る炉上ゝめ
松炭ゝ炭ゝ炭ゝ入れ炭ゝ炭ゝ炭ゝ焼
ゝゝゝゝや覺ゝ殺て居ゝゝゝ
婦人ゝ覺のくゝゝゝゝゝゝ
覺のゝやゝれゝゝゝゝゝゝ
覺のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
覺ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
炭ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一茶　武陵　半古　竟古　几董　盛書　保古　珍石　素堂　外史　士朗

炭賣

炭賣炭矣江湖に終る事を作すより
炭の業やあの気の就至りて
今のよし松風 入家夫か
すき炭のこしの煙りや旨発
炭賣の義をしよ九十之
庵ともしまるみすとに
炭賣て外る金へ変りより
めつらう庵のいろくれ
没有ふりて炭沢山の火鉢か

風炉煮

大鉢

たちる氏物語る火鉢か
ゐれめ今ふまの寿しを古火桶
猿沢寒て人の行をこす火桶か
うき風のる女の中て火桶か
人氏めぬ火桶ぬりて歌なん
火桶抱てそ人あるしや
おうへや火桶沈寿一夜
白夜や火桶に埋む菊の花
火桶抱てそ氏ぬ松風相火桶
抱るすそ秋や松風相火桶
楽壷の人むつまじや桶か

泉水
喜村
公
菊吉
月城
几董
二都
盛喜
於多
桂不
素機

巨

旌

旌さやふる初を楯
角力とり代の業あるを楯
しき名ある時代の日まよ大楯
御めぐの妻子おさるつか
人老てさるひろあるる跡ろ
ひろ大ぬてのくるつか
旌罕しオのくまもるつか
オろうを生まれ
まよ月日覚てさるつか
沈代オを旌るひしのろつふる

楯重
香立
一首
道元
天文
月記
李開
無限
養子
庭人
楯重

埋火

埋火やつれなき君が夜の心
埋火をかくしもてゆく乳母哉
埋火や手さぐりに探す懐中
埋火やいふもの憂き夜の心
埋火や老の心の細りゆく
埋火を見てゐる内や人さわ
埋火やあるかなきかの命哉

半古
吉弥
芝村
几董
白雄
召波
青蘿
蕪村
一茶
丸水

炬燵
焼炉
湯婆

炬燵出て海士のかつぎや松の雪
炬燵出て抱けばつるる枕の白
炬燵出て素足見るるや花の昼
炬燵出て戻の入る敷居かな
炬燵出てむかふの松の風
炬燵出て片足つそる焼野かな
焼炉哉元の硯もとりまぜて

菅笠
蕪白
卓池
春人
秋色
朝雪
一枝
春人
歌右
樗良

蕭園

紗子　佐藤亜来
紗帽子　芝お合
　　几董
　　松元
　　蓼太
　　信人
　　炭業
　　花屋　京園
　　江戸　仝峯
　　應美

完来
成美
冥々
道亮
おかや
護角
白人
尾張　雲ム
名古屋　濱藻
　　茶亮
　　葉ム

年鉞　多紋やうもあれどもとりこやなどゝいふものゝ多くは小形のものにて一筋ほりてそのほりくぼめたるところへ金銀の象嵌をなしたるもの也

斤斧　江戸にては手斧といふ

旋揮　飛騨にては旋毛斧といふ

鎚揮　自然の栗や柿の実の形したるもの也

旋毛斧　飛騨にては旋毛斧といふ

柳葉　薬研形　菅玉　成美　人　祥来　菅之一等　成美　道彦　一葉　市房

せんとう井を叱て西りくり　雲斬
鶏に教もよう子不苅季ゆ　栄花
ぜんや井ま　寺鶏兄
まるめる処初老九やくの内　女子代
てしともきるとも新ゆ　薗去
まるつやいやくまるまる本薬　妻酒
まのくちてまゆ寒ゆ本薬　士酌
酌るうくやさる本妻をうく新有　民笑
天にうす学るまし　の妻　不警
まの角を引ける乱妻ろ　雑吸
まのう学るまゆ　月ろ　保吉

羽子板妻　西什
絵長妻　松井
つ松妻　完妻
紫井妻　道売
遠　栄　自化
小前妻吉次もうくまの寺　養人
厂野をうれてまの寺　妻歩雪
まの寺後にて妻よの古　境　昌叶月
芸ままて同くてまの寺　月化
まの寺る民勝うう酌うく　妻業
小前妻吉次もうくまの寺　養務
ら主元にてまる板妻のまくゆ
山里の柳まで稲米妻
月うまもなく民売や松の寺
人に妻まくてまる紫井妻
ろ有うてまる乱の流や

閑井
凡釜
一首
竈松
木精
妻人
竈古
樓亢
書莽
大江朝

狐首
柳莊
素檗
妻人
雄剛
百妻
楊雨
二樓
益村
方今
遠亮

○松立　古屏風　妻鯛味噌　重忘

君をもれじと忘るるもうらめしやその忘るるを思ひ出でたしと忘
えりもえりもと草を摘む人やと忘
松の木にもれて見えやと忘
妻恋着の雄剛百妻
雄人松風うらめしや
重忘れじの忘れ草　忘
重利生
重
重ね
重利生
小さり心の忘れ草の古刀鮫の柄
地獄へつれて行く用意

年〻ものゝ雫うけて苔古り
年慶松の梢も等しあへるもの慶
玄迫てやゝ三百そうへおもん
老松やまた迫つゞき
初茅の秋のうら凡そまた迫こゝ
玄谷　嵐ふき落るものゝひゞおと
うち九その迫るまでに
玄まつとしの人ふるの寒かな
玄まつや頼方親赤の筋のロ
覚るまでそまたまでて
まつまでのおもはるゝ枝うれ

乃飛雲戈
在院武田
白梅
胆九
雨人
護国
秋夫
吳老

丈方
道亮
成美

○百十三

題叢冬

まつ玄のうちてかり民部九流
ゆつり葉の苔もまだらに
玄まきまつ色あるゝ柳かな
来るゝ
玄筋
ゝ雪
ゝ暮

作号
可笑
亜梁
兎亮

黄九
呼牛
梅九
蔓古
兎亮
保吉
斗入

今
春亜
合
甫尺
長山
士朗
湖江
樗堂
巣兆
成美
合

完来
暮三
一茶
雪芝
寛松
春人
文角
自居
飛鵬
路通
可笠

秋冬

作之句にあつてそのまことの
まことしきものうるはしの詩
歌若くは絵のやうなるもの
のありとやいはん天は下
採ることなき第一義の
ものや著るされたる来る
りものにあらず二義
のものこそうるはしき
まりやをもつて詞に拘拘
まりまを基本の美の
りものあるやうに拘の
ものなり

○百十六

題叢冬

まことしきものうるはしの詩
歌若くは絵のやうなるもの
のありとやいはん天は下
採ることなき第一義の
ものや著るされたる来る
りものにあらず二義
のものこそうるはしき
まりやをもつて詞に拘拘
まりまを基本の美の
りものあるやうに拘の
ものなり

勝手
大晦日

[illegible]の湖水に数の枝　陸奥　貞幸
[illegible]ひの流の雪　椿雪
[illegible]の[illegible]　尾張　如是
[illegible]へたる年の数　完郷
[illegible]ぬ[illegible]　洞賀
[illegible]赤[illegible]　陸奥　梅子
[illegible]家[illegible]　飛州　東路
[illegible]む[illegible]　存亜
[illegible]家[illegible]　年人
[illegible]　東角
[illegible]　箱之

除夜

大[illegible]　[illegible]
[illegible]の夜や武蔵野の　[illegible]
隆寿の流[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

手柱　[illegible]
兎毫　保吉
芳之　乙二
道竟　[illegible]
[illegible]　右楼
[illegible]　馬舞
[illegible]　[illegible]

世不曰樂放不知
而終身有所不
知而終身有所
不樂而終身有所
樂而終身有所
不樂而終身有所
樂而終身有所
不樂而終身有所
樂

浦人た節とのふおほよそ銭弐百の比法門
人まち好名たち居ふ人もの句ハ諸集ニ散
見すまじき句をのミ記てを世寳暦比ニ
此ふそう仕ます仕ますて庶くあつめ新くそう
ひてそれ数一万三千余句ニ至る然ニ
其仕例銭ミむ人ニ此書にあつ比ニ関ふ
事ニのミ(ママ)わまじ然ニ人のいふ夫木抄ニも
名たゝぬへ記ニ

ま(ママ)ゐてよそ川のまちかそ
ゆくへまで郷のひの向ふそむこひ軍務
乃心残ふそて後歩のふそ宮妙のふそひ
下北入ふ寿に和哥に師なまふ三の
九てなゝすしとのまに角古人の求ふ
ふ残ゝめてふくちかく残ふちふ至ふ
なう残ゝいま初の林ふ入ふ比山ニ乃枝
折仏りて世にひろめむといふ人あつかふ

鴈皮 書物紙

江戸日本橋通四町目
金花堂須原屋佐助

同 半切類

唐紙類	五雲箋	杉皮紙	海苔箋	柳皮紙	檜皮紙	生漉紅流	色奉書
紋唐紙	五色唐紙	潜雲紙	芙蓉箋	鈔雲箋	杉原紙	本鍛甲紙	白雲紙
櫻皮箋	羅紋紙	布頭箋	魚網箋	松皮箋	梅皮箋	金箔押	金砂子
藤皮箋	仙連紙	金葉箋	檀紙同五色	小高同五色	水玉紙	雲龍紙	五色雲龍

鴈皮 半切 長尺 巾尺

奉書 十色 半切 長尺 巾尺

半紙判 美濃判 小奉書判 越上厚薄 大中小あり
美濃判 半紙判 小奉書判
灰汁打 金葉紙 美濃判 半紙判 小奉書判

備しく化意ち功法ものハ好ム級なて一切の文
里玉、紙なもう門妙不可思ものへ訳のけ
ハもそなりめへ すべて庖丁の形ち輪廓
う輪おのくを形心不可思ち有ハ言葉もて
諭すへきにあらひ不可思ち決

随斎筆

紋紙 一名ちらし
奉書繪半切品々
摺上雁皮楮交繪半切
古代倭めき形半切 唐紙
封筒類 雁皮楮交奉書 唐紙共ニ
詩箋類數品 流名家画中清雅生
五色系入袖草紙 并懐中手帖類
和漢諸流折手本類 半切 雁皮 奉書 唐紙
雁皮書画帖印可手鑑 共ニ折本 巻物ニ
懐紙白帖 五百枚 位
唐紙 雁皮 奉書 半切 雁皮 楮交
色紙短冊品々 花色短冊
深紙 雁皮楮交奉書 雲龍 共ニ
繪草紙 泳草紙 雁皮楮交
東雲代紙 行成表 短冊挟 風雅集 短冊掛
東雲代紙 重行成紙 短冊掛 數品 箏本箔打 唐紙 札紙
四季花重詰一包 四季花重詰一包
花色合 武者双六
源氏双六 江の島双六
源氏川狩 智恵形 歌のるた 風雅双六 諸のるた
源氏牧狩 智恵形 歌のるた 風雅双六 諸のるた

和漢諸流御筆並画筆

集古十種 銅器 印章 文房 楽器 鐘銘 碑銘 右十七種ハ一連乃
七祖賛 小倉色紙 箱額 肖像 古画 玉澗景 部ものハ好次第
甲冑 馬具 刀劔 弓矢 旌旗

四季必用 字尽用名めし 小本一冊 付 彩色摺 四季折節草木二百四十種を図ス

唐本和本儒書佛書歌書俳書詩文書寫本雜書
和漢法帖御経類新本古本都而不限何書物仕入置申候且又
陸藏版物木筆土筆彫刻仕立下直ニお働キ申候間御用御
御書物数仕立合式帳御経書下地ニ数仕候好次第仕立

勢南菊所著

梅室閑合集 二冊 既刻
蕉翁文集愚注 五冊 同著 嗣刻
松園隨筆 三冊 同著 嗣刻

梅室宗匠好
弐尺 幅
白帖 画帖
短冊 懐紙

室花堂

発売所 書肆 勝村治右衛門
大阪心斎橋筋
秋田屋太右衛門
尾州名古屋
永楽屋東四郎
仙台国分町
西村治右衛門
駿州松坂
柏屋兵助
同御城下
山形屋儀兵衛
名古屋本町通三丁目
須原屋茂兵衛
同日本橋通一丁目
同 佐助

倭論農白駁書

荊編